

授業への思い

2023.11.9

昨年、ある小学校の先生と出会った。7月だった。彼の授業を見て、指導助言をした。知り合いの校長先生の学校が、福島市教育委員会研究委託校になった。彼は、その学校の研修主任であり、7月の授業研究会の授業者だった。

小学5年生の国語の授業だった。教材は『世界でいちばんやかましい音』だった。2学期の10月には、違う先生が、小学6年生で国語の授業研究を行った。『海のいのち』の授業だった。その指導助言もした。その学校は、翌年には研究公開を控えていた。

今年になり、研究公開の指導助言の依頼がきた。担当は、小学6年生だった。授業者は、研修主任の彼である。まず5月に、授業研究が行われた。『風切るつばさ』の授業だった。ここまでで、この小学校には、3回お邪魔している。残るは、10月27日（金）研究公開当日である。

夏休みに入る頃だった。彼から連絡があった。10月の研究公開に向けて、授業の相談に伺いたいとのことだった。私の方から注文を出した。「学習指導案をつくる前に来てください。どんな授業をしたいのか、その思いさえあればいいですから」指導助言を受ける立場の授業者は、指導案の一次案のようなものができた状態で、指導助言者からアドバイスをもらうことが多いかもしれない。

これがよくない。一度、形になってしまったものを変えるのは容易なことではない。一次案とはいえ、指導案は授業の設計図である。場合によっては、設計図の書き直しとなることもある。こちらとしては、書き直してくださいとは言いにくい。

彼は、8月3日にやってきた。教材は、『海のいのち』とのことだった。大賛成である。小学校文学教材最高峰の作品である。授業研究のチャンスがあるのであれば、ぜひ『海のいのち』にチャレンジしてほしい。先生方は、年に何回も授業研究の機会があるわけではないだろう。1回、多くても2回くらいだろう。小学校、それも国語であれば、『ごんぎつね』『大造じいさんとガン』『海のいのち』などの定番教材にぜひチャレンジしてほしい。自分の力量、授業力を試すにはもってこいである。

彼に、どんな授業をしたいのかを聞いてみた。根拠と理由を明確にして読ませたいとのことだった。ここが重要である。授業者にどんな授業をしたいのかの思いがないと、非常に苦しい。子どもにどんな力をつけさせたいのかもあやふやになる。思いが授業をつくるのである。

授業者である彼といろいろな話をした。こちらからアドバイスはしたが、それを押し付けようと思っただけではない。話しているうちに、彼の中に、授業のイメージができていけば、それでよかった。それが、こちらのねらいだった。彼は、「だんだん見えてきました」と言って、校長室を後にした。

(897号に続く)